

+++++

クマもタヌキも食肉目

動物応用科学科3年 杉浦義文

今年クマの出没が多い年だった。10月に入ったころから、クマの出没がニュースでちらほら見られるようになってきた。10月の半ばには北海道の斜里町の中心市街にヒグマ2頭が出没したり、11月には岩手県でツキノワグマが高さ十数メートルの電線にかみついたまま感電死している状態で見つかったり、この秋はほぼ毎日と言っていいほどクマのニュースを目にしていた。ある報道番組では今年大きな出来事の中に「クマの大量出没」が含まれていた。今年クマの出没は2006年の大量出没の時ほどではなかったものの、長野県内でのツキノワグマの出没件数は2569件で前年度の2.6倍だそうだ(2010年11月時点、長野県林務部より)。

そんな状況のなかで私は10月12日～19日の間、野生動物保護管理事務所(通称WMO)のニホンジカ区画法調査のために長野県の南信地域に乗り込んだ。南信地域は2006年の時には他の地域と比較すると出没が多かったところで、WMOの職員の方からもクマには十分に注意してほしいと調査前から念を押されていた。私は野生のクマを見たことがなかったので、別にクマに遭遇してもいいかな、むしろ出会いたいなあという気持ちであった。

今回の区画法調査というものは調査地を10個ほどの区画に分け、その区画内で聞いた鳴き声や出会ったシカを記録するというものである。最初の2、3日はWMOの方と一緒に山を歩くことになった。2人で歩いていれば、クマに会っても何とかなるだろうと思いつつクマに会った時

の対処の仕方を入念にチェックし、いざ調査へ出発。長野の山の地形は、以前に同様の調査を経験した金華山と比較するとかなり急峻であった。場所によっては森を歩くというよりは、ロッククライミングに近いところもある。こういう地形では、上りは野球部で鍛えた体力で何とかなるものの、下りは歩くたびにズルッと滑ってしまう。かと言って斜面が急なのでゆっくり歩くにも歩けず、急ぎ足になってしまいブレーキを掛けようとするとズルッ、ザーッと滑って転んで辺りの落ち葉とともに斜面を落ちていくのであった。歩き慣れるまでしばらくこんな状態が続き、初日はクマどころか野生動物を見る余裕があまりなかった。

しばらくはWMOの方との調査が続いたが、調査にも慣れてきたこともあり、いよいよ一人で調査区画に入るようになった。調査地に向かう車のなかでは、一区画を私に任せてくれた期待に応えようという気持ちと、一人で山に入るワクワク感で気持ちが高ぶっていた。今度の調査地も地形は急峻だったが、法面の工事のために人が入っていたので林道があり、わりと歩きやすそうであった。しかし、いざ林内に入っていくとこれまではなかった気持ちが芽生え始めた。「クマに会ったらどうしよう」。一人になると急に不安になり、背後でガサッと音がするたびに携帯しているクマスプレーに手を掛けた。さらにこの林はササがびっしりと生い茂っていた。自分の腰ほどの高さなので進むのが困難と言うほどではないのだが、歩くたびにガサガサと音がしてしまい周りの音が聞きづらい。仕方ないのでしばらく歩いては止まり、また歩いては止まることを繰り返し周りの状況を確認し、シカの鳴き声やその気配をうかが

った。しばらく歩くとササがなくなり順調に調査を進めていたが、別の区画の調査員から無線が入った。

「今、私の5m前にクマが出てきた。」
ついに出了、やっぱりこの山にはクマがいるんだということを再確認した。幸い、そのクマは人を見るとすぐ逃げ去っていたそうだが、これまではシカ探しで多少薄れていた不安が再び戻ってきた。

そんな不安がありながらも調査を1時間半ほどで終え、調査終了後の集合場所を目指した。調査が終わってしまえば、シカを見つけても記録する必要がないためスタスタ歩けばいいのだが、見たことのない植物や糞、足跡があるとつい足を止めてしまう。タヌキのタメ糞なんかもあり、「何食ってんのかなあ」と糞があるたびにほじくり返していたのだが、林道の脇にしてあるでかい糞が目に入る。野犬のかと思ったが、それにしても太いし量が多い。私が初めてみたクマの糞であった。クマの糞がどんなものか知らなかったが、とりあえず大きくて見ればわかるということを知っていたのでまさにこれだと確信。糞を崩すと赤茶色っぽく何かはわからなかったが種が入っていた。秋のこの時期なので何かベリー類を食べていたのだろう。初めてクマの糞を見られたことには感動したのだが、糞が新しそだったので緊張感も出てきた。

もう寄り道せずに帰ろうと決意し、再び歩き始めた。法面を工事している大きい林道に出てきて集合場所までもあと少しというところまで来た。ふと交通事故は油断する自宅周辺で起こりやすいということを思い出していたとき、ある音がしていることに気づく。携帯のバイブレーションかなと思い、確認するが携帯はいつものウマの待ち受け画面。歩いて行くたびにその音が大きくなり、それが動

物のうなり声ではないかと思い、少し焦る。林道の奥のササ藪から声がしているかと思っていたが、どうやら自分が歩いている道のすぐ脇の側溝の中からのようだ。

「ひょっとしてクマ…。」
この時点でその声がするところまでおよそ10m。その声がしている側溝付近に差し掛かると「うーっ」

という大型犬のようなうなり声がさらに大きくなる。この低くて凄味のある声はクマ以外にはないと思った。というかそれ以外にこんなうなり声の動物が全く頭には浮かんでこなかった。急いでクマスプレーのロックを外して噴射口を対象物に向けつつ、後ずさりする。

「近くでクマと思われる動物がうなっています。この付近を通過して集合場所に向かう人は気をつけてください。」
と無線を入れるが、焦って舌が回らなかった。ある程度距離がとれ、クマが側溝から出てくることもなかったのもので、一目散にその場を立ち去った。

調査員の方々が調査を終え、集合したときに詳しい状況を話したところ、

「じゃあいってみよう」
ということになった。私が声しか聞いていないので皆は半信半疑のようである。クマスプレーを構え、現場へ向かうとまたうなり声がした。さらに近づくとガサッという音とともに側溝の奥へ行ってしまった。

「やっぱりクマがいる」
そう思っていた私に意外な言葉がかけられる。

「ここにタヌキのタメ糞あるよ。側溝の奥、照らしたらタヌキの顔もみえた!!」
えっ、タヌキ…??たしかに声がしていた場所にはこんもりとタメ糞がある。でもタヌキのうなり声ってあんなに迫力ある

のか??と疑ったが、タヌキの姿が確認され、糞まであったらもうあの声の主はタヌキだったに違いない。焦って入れた無線が急に恥ずかしくなる。

冷静に考えると、側溝にクマのような大きい動物が入るとは考えづらく、クマだとしてもかなり小さいものだっただろう。しかし、あの迫力ある声をクマがいたと言われた状況で聞くと思い違えてしまうのも仕方がないかと。ただ、タヌキも分類上は食肉目だったんだなと思うと、あの低くて迫力満点なうなり声も妙に納得する。

今回のタヌキ騒動でクマが身近にいることの恐怖や不安を身をもって感じた。クマを保護していくことも必要であるが、畑仕事をしているすぐ脇の森にクマがいることがどれだけ精神的につらいだろう

か。実際にこのような状況を知らないところで、駆除だ、保護だといっても最前線にいる住民にしたら、机上の空論に感じてしまうのではないかと思う。私はまだこのような問題に対して大それたことは言えないが、できるだけいろいろな調査地にいき、現場に行かなければわからないものを感じて、自分の考えを深めていければと思う。